



TITLE:

國民生命史觀

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 國民生命史觀. 經濟論叢 1937, 44(3): 358-377

ISSUE DATE:

1937-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130913>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三號

第四十四卷

昭和二十三年三月一日發行

論叢

賣上税の課税方法

法學博士 神戸正雄

國民生命史觀

經濟學博士 石川興二

貸借對照表の問題

經濟學博士 蜷川虎三

時論

輸入統制の目的

經濟學博士 谷口吉彦

研究

國際的再保險と爲替相場の變動

經濟學士 佐波宣平

シユラーの保護貿易論

經濟學士 岡倉伯士

ミッダルの貨幣論について

經濟學士 服部新一

說苑

土地利用組合に關する一資料

經濟學博士 八木芳之助

スタハノフ運動

經濟學士 大塚一朗

農民の税外負擔

經濟學士 柏井象雄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

國民生命史觀

石川 興 二

一、序

現代市民社會の革新期の進むにつれ、實踐的立場の對立は益々激化し、これを變革せんとする社會主義的立場と國家主義的立場との對立は、至るところに於て見られる、今や世界の諸國家も次第にこの左右の兩陣營に分割されつゝある。而も我々はこの相對する變革的立場の何れかに立つて現代日本の新革期に處すべきではなく、先づこの相對立するところの立場を批判し止揚することによつて、より具體的な立場を確立しなければならぬ。これが眞に國民主義的立場と呼べるべきものであることは既に述べたところである。¹⁾

而もかくの如き國民主義的立場を確立せんとせば、先づその基礎たる歴史觀を確立しなければならぬ。これ一つの實踐的立場は、その對象たる歴史的社會的實在の本質觀の上に確立され得るものであり、この實在本質觀はその最も具體的な形に於て歴史觀なるが故である。

我々は學史上に於て二つの偉大なる史觀を見る。ヘーゲル歴史觀とマルクス史觀とか即ちこれであつて、前者は國家主義的立場を、後者は社會主義的立場を基礎付けるものである。この相對立する史觀を批判し止揚するこ

1) 拙稿『新國民主義の立場』本誌第四十三卷第四號第五號參照。

とによつて、茲に、國民主義的立場を基礎付けるべきところの歴史觀を明にしなければならない。

二、國家史觀、社會史觀、國民史觀

先づマルクス史觀の社會史觀としての根本的立場を明にせんに、社會主義なるものは、人間の本質的な有方を市民社會的に考へるが故に、人間歴史の進展をも市民社會の構造に於て考へることとなる。即ちこの市民社會の地盤を爲すものは經濟社會であるが、そこに於ては物質的價值が生産分配されるものとして、本質上有階級と無階級との階級對立が生じ、前者が支配者階級となり、後者が被支配者階級となる。かくてこの立場に於ては歴史はこの兩階級の闘争によつて進展するものとして考察されることとなる。これ社會史觀であつて、その代表的なるものがマルクス史觀である。即ちマルクス史觀に於ては「人類の歴史は階級闘争の歴史である。而して更にこの支配者階級は現存する生産關係を代表するものとして、被支配者階級は發展すべき生産力を代表するものとして、從つて兩階級の階級闘争は生産關係と生産力との矛盾對立に基礎付けられる。かくてこの社會史觀は、所謂唯物史觀となるのである。これに對し國家主義の立場は人間の本質的な有方を國家的存在に於て考へるが故に、人間歴史の進展も國家的存在の構造に於て考へられる。この國家なるものに於ては國家の權力意志が最高なるものであつて、人々はこれに對し服従の關係に立つ、故にこの立場に於ては國家意志なるものが人間社會に於ける最高原理であり、die fürstliche Gewalt と云はれるところのものである。人間はこれに絶對的に服従すべきものであり「法に従ふ意志のみが自由である。」かく既に超人間的な性質を有する諸國家意志なるも

- 1) Hegel, Rechtsphilosophie. § 182 以下参照。拙稿『ヘーゲル市民社會論と經濟學』本誌第三十八卷第一號参照
- 2) 拙稿『經濟の本質』本誌第三十七卷第六號参照
- 3) Hegel, Rechtsphilosophie. § 275.

のは、更に超人間的なる何物にか基礎付けられることとなり、かくて國家史觀なるものは本質上形而上學史觀となる。この史觀の代表的なるものはヘーゲル史觀であつて、そこに於ては國家意志は世界精神 *Weltgeist* 又は神に基礎付けられた。¹⁾ 即ち「國家とは地上に存在するところの神の理念である。」而して「神は世界を支配する。神の支配の内容、神の計畫の實行が世界史である。」かくて國家史觀は社會史觀と反對に、唯心史觀となる。

然るに既に述べしが如く、人間なるものは本質上何等かの國民としてあるものであるが、國民史觀なるものは具體的なる國民の構造に立脚するものである。この國民的存在に於ては、既に明にせしが如く、自然と文化とを共にせる人々が國民的共同感情によつて共同體的に結ばれ、このものが更に國家的制度並に社會的制度により構成されて居るのである。²⁾ この具體的なる國民的存在に於ける國家の面を一面的に徹底することによつて國家主義的立場が、またこのものに於ける社會の面を一面的に徹底することによつて、社會主義的立場が成立する、のである。かくて共に片面的對立的なる兩者は國民史觀の中に止揚されることとなる。

而もヘーゲルによつて國家史觀が、またマルクスによつて社會史觀が成立したことは決して偶然でない。今これをその生的基礎について見るも、シュワーベン人として生れて獨逸的性格を特に豐に有したるヘーゲルが、國民的統一を缺けるが爲めにナポレオンにより蹂躪されたる後それを中心とすることによつてこの國家的統一の完成されんとするところのブローセンに於て、哲學したるに對し、國家なき民族であるユダヤ人として生れたるマルクスは世界の資本主義的中心としてのロンドンに於て哲學したのである。かくて前者が人間の國家的存在を原理とせしに對し、後者は人間の社會的存在を原理として哲學的に考察したのである。我々はこの兩立場の相對立

1) 拙稿『ヘーゲル史觀の實踐的構造』本誌第三十六卷第四號第五號參照
2) 拙稿『新國民主義と國民共同體』本誌一月號參照

する現代に於て、且つ現代諸國民の中最も具體的な國民的構造を有する日本にあつて、正に國民史觀を確立すべき生的地盤に立つて居るのである。

三、國民的生命と國民的制度の辯證法

ヘーゲル史觀もマルクス史觀も共に歴史の發展を辯證法的構造に於て把握するのであるが、國民史觀も國民的發展を辯證法的構造に於て把握する。而もその辯證法的構造は、各々異なるのである。以下先づこの兩史觀に於ける辯證法的構造を批判し止揚することによつて、國民の辯證法的發展の構造を明にしよう。

ヘーゲル史觀に於ける辯證法は生命と表現と理解との構造にあるのであつて、即ち「世界史とは精神が自己本來の姿に關する智識を活動によつて得來るところの精神の自己表現である。即ちこの神は自己の生命を國民的實在として表現し、この表現の理解を通じて自己の本質の自覺に達するのである。而してこの神の分身としての各國民精神の發展についても同様の構造が見られる。即ち各々の國民精神は「朝」、「晝」、「夕」に比喻さるべき三段の發展段階を經過する。「朝」に於て *an sich* の状態に於てある國民精神は「晝」の *für sich* の状態に於て自己をその國民的實在として表現し、「夕」の段階に於ては、この自己の表現せし國民的實在を反省することによつて、その本質的自覺に到達する。これと共に、この國民的實在は否定され、更に他の國民精神について同様の發展がなされ、かくて「必然的な發展の段階に於ける國民精神の各原理はそれ自ら一の一般的精神の契機にすぎない。その一般的精神はこの原理を通じて歴史に於て自己捕捉的總體 *eine sich erfassende Totalität* にまで高まり完了

するところのものである。」

かくの如くヘーゲル史觀に於ては、生命と表現と理解とによる生命の發展的構造が明にされたのであつて、このことは人間的生命の發展的構造を明にするにとつて極めて重要である。

即ち人間なるものは、唯心的なるものでもなく、また唯物的なものでもなく、*psycho-physische Lebensinheit* 「心的物的生命統一體」なるが故に、生命と表現と理解とは人生の根本構造である。先づ、この人々の相互の交渉は、直接に唯心的になされ得るものではなく、先づ *das den Sinnen unzugängliche, nur Erlebaren* 「感覺に觸れないで、唯だ體驗し得られるのみなるもの」であるところの内的なる生命を身體を通じて外界に表現し、この表現を相互に理解 *Verstehen* し合ふことによりなされ得るのである。加之人間は自己自身をもかくしてはじめて知り得るのである。¹⁾ 即ち人々は自己の生命の表現としての云爲言行の理解を通じてはじめて眞に客觀的に自己を知り得るのであつて、只だ單に自己を如何なる人間であると考へるとも未だ眞に自己を知つたとは云ひ得ないのである。更に人間の生命なるものは、自己を外界に表現し、この表現を理解することによつて自己を發展せしめ行くのである。例へばこれを一人の人の學問的生命について見るも、この生命は學術的作品として自己を外界に表現し、この表現によつてこの發展段階に於ける自己を完成し、この表現を理解することによつてはじめて明に自己の學問的生命の内容を知り、この理解を通じて更に自己を發展せしめて行くのである。これを國民について云ふならば、或發展段階に於ける國民的生命は、諸の文化を表現しこれを理解することにより自己を高めて行くのである。

1) Dilthey, Ges, Schrif. s. 87

ヘーゲル史觀なるものは、この人間の根本構造としての生命と表現と理解による生命の發展の根本構造を云はゞ擴大して神の立場に移し、この神の生命と表現と理解との辯證法的關係に於て、世界史の發展的構造を把握せんとしたのである。而してこのことによりこの人間の根本構造が擴大され明示されたのである。故に我々はこの神の生命の構造を人間的生命の立場に返へすことによつて人間的生命の發展的構造を明にし得るのである。

このヘーゲルによつて明にされたる生命・表現・理解の構造は、一の發展段階に於ける生命の發展の構造を明にし得るが、而も一の發展段階より次の發展段階への生命の變革の構造はこれを明にし得べきものでない。かくてヘーゲル史觀に於てはこの變革の構造が論理的な概念の構造によつて説明されて居る。即ち「朝」に於て即自的な狀態に於てあつた國民精神は、「晝」に於て諸種の國民的文化實在として自己を表現し、「夕」に於てはこの諸現實を通じて精神の一般的本質を理解する。この精神の一般性 *Allgemeinheit* の自覺は、その特定の國家的實在が内容上制限されたるものであり特殊性 *Besonnenheit* に於てあるものなることを個々人に明にして、個々人をこの國家的全體より引き離なすこととなり、かくて國家的實在は亡び行くと考へられた。即ちこの國民的存在の變革の構造は全く特殊性 *Besonnenheit* と一般性 *Allgemeinheit* との論理的概念の構造によつて考へられたものであつて、これ *Besonnenheit* 特殊性の段階としての市民社會の *Allgemeinheit* 普遍性の段階としての「國家」へ止揚が考へられたと同様の構造である。

デイルタイはその青年ヘーゲルの研究に於て、「ヘーゲルの歴史眼は、こゝに（青年期の著作―筆者註）直接的に現れて居る。此等の又は類似の敘述の讀者はこの若きヘーゲルの中に偉大なる歴史家の素質があつたが、而も

それは彼が尙ほ歴史の聯關を諸概念の關係の中に固定せしむることを企てる以前に於てである云ふことを確信せざるを得ない」と云ふて居るが、事實この「歴史的聯關の諸概念の聯關への固定化」は後年のヘーゲルに於て著しく見られるところであつて、彼自らこれを「自己を生産する諸概念 Begriffe の順序は、同時に諸形態 Gestalten の順序である」と明言して居る。¹⁾

かくて我々は、このヘーゲルに於ける歴史的變革の構造の概念化を打破し、これを現實の生の構造に還へさなければならぬのであるが、この點に於て、マルクス史觀に於ける辯證法的構造より學ぶところが少なくない。

ヘーゲルの『法の哲學』の『批判的修正』を以て彼の哲學への道を開いたマルクスは、ヘーゲルの『辯證法』を重んじながら、これを「顛倒すること」を必要であると考へた。即ち彼は次の如く述べて居る。

「私は公然かの偉大な思想家(ヘーゲル)³⁾の門人たることを承認した……辯證法はヘーゲルの手において神祕化されたけれども、そのことは決して、彼がその一般的運動形態を、はじめて包括的な且つ意識的な仕方、敘述したと云ふことを、妨げはしなかつた。辯證法は彼にあつては逆立ちしてゐる。我々は、神祕的な外皮の中に合理的な核心を發見するため、これを顛倒しなければならぬ。」⁴⁾

かくてヘーゲル史觀に於て、歴史の原動力を構成した精神——世界精神 Welgeist 並にその分身を成せる國民精神——なる唯心的原理は、今やマルクスに於て、物的生産力 die materiellen Produktionskräfte なる唯物的原理に置き換へられた。このものが恰もヘーゲル史觀に於ける精神の如く、歴史の發展を通して自己を一貫して變化するものであつて、それは生産關係 Produktionsverhältnisse なるものとの辯證法關係に於て自己を發展させて行

1) Hegel, Rechtsphilosophie. § 3a.

2) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort.

3) 筆者註

4) Marx, Das Kapital. Vorwort zur ersten Auflage.

く。こゝにマルクスの唯物辯證法の根本構造があるのであつて、これが土臺となり他の一切のものはこの上に立ち、これに規定されて動いて行くのである。即ち

「人間は彼等の生活の社會的生産に於て、一定の必然的の彼等の意志より獨立せる諸關係を、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展段階に相應するところの生産諸關係を、與へられたものとして受けとる。これら生産諸關係の總體が社會の經濟的構造、即ち眞實の土臺を形成し、この土臺の上に法制的政治的の上層建築が打立てられそれに特定の社會的なる諸意識形態が相應するところのものである。」¹⁾

かく相應してゐる生産力と生産關係とはやがて矛盾關係に陥る。即ち「社會の物的生産諸力は、その發展の一定の段階に於て、これまでそれがその中に於て運動し來つたところの現存の生産諸關係と矛盾に陥る。此諸關係は、生産諸力の發展諸形態より、その桎梏に轉化する。茲に社會的革命的時代が始まる。經濟的基礎の變動と共に、巨大な上層建築の總ては、除々に又は急速に變革する。」²⁾

次に一の時代の次の時代への變革について、次の如くに述べられて居る。「一つの社會形態は、その形態が狹すぎるやうになるまで總ての生産力が發展してからでなくては、決して沒落せず、また新たな、より高度の、生産諸關係は、その物質的な存在諸條件が舊社會自體の母胎内で孕まれたるまでは、決して從來のものに取つて代りはしない。」³⁾

このマルクス史觀に於ける生産力と生産關係との辯證法的關係の把握於ては、人間の生命の發展變革の辯證法的構造の深き洞察が見られる、先づ物的生産力なるものは、人間が自然に對して働きかけ必要とする物財を生産す

1) 2) 3) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort.

る力である。かく人間が自然に働きかける爲めに人々が結ばれて居る關係が、生産關係である。故に社會的生產に於ては生産力は何等かの生産關係と結ばつてある。即ち何等かの生産關係に結ばれてある人々が生産力を發揮して居るのである。この生産力なるものは、その一定の發展段階に相應する生産關係に於て發展し行くのであるが、而も或程度にまで發展し來るならば、最早やこの生産關係に於ては發展し得なくなる。即ち今まで生産力の發展を助けるものであつたところの生産關係は、生産力發展の束縛となる。かくてこの發展し來れる生産力はその生産關係を破つてこれを變革し、より高き生産關係に於て更に新な發展を續け行くのである。

この生産關係と生産力との關係の構造は、ヘーゲル史觀に於て見られた生命と表現としての表現としての特殊、實在の普遍的、本質的理解による否定と云ふが如き靜的な且概念的な構造とは異なり、人々の聯關を構成する生産關係とかく構成されたる人々の發揮する生産力との相應矛盾變革の動的な關係を明にするところのものである。

マルクスはかくの如く、人間を結ぶ關係とかく關係する人間の力との間に於ける辯證法的關係を深く把握したのであるが、然し人間の市民社會的有方を根本的なものと考へたマルクスは、これを本質的に經濟社會について考察した。故に、この人間關係は經濟社會に於ける人間の生産關係となり、人間の力は經濟的な生産力となつた。而して他の一切の人間生活はこの上に規定されて居るものと考へられた。かくて人類の歴史は經濟社會的階級闘争の歴史となり、また人類歴史の時代は「經濟的社會形態の諸時代」Epochen der ökonomischen Gesellschaftsformation¹⁾となつたのである。

然しながらかくの如き人間の關係と人間力との辯證法的關係は單に人間の經濟生活に限るものではなく、人間

1) Marz, Zur Kritik. Vorwort.

生活の全體について見られるところのものである。即ち人間を聯關づけて居る關係なるものは、これを一般的に云へば制度であるが、制度なるも人間的生命の表現の一種である。この人間的生命の表現であるところの制度なるものは人々の關係を構成し、かく構成されたる人々の生命は、この制度の下に於て成長し行くのである。而もこの成長せし生命はやがてこの制度の下に於ては、成長を續け得ざるに至り、これを打破して新なる制度を表現し、この下に於て新なる發展を續けて行くのである。マルクスがこの人間的生命と制度との辯證法的本質をはじめて明確に把握したことは、人間歴史の發展變革の構造の解明に對し重大なる意義を有する。只だ我々はこれをマルクスに於ける經濟的社會生活への限定より人間的生命の具體的全體へ擴充して、考察することを要するのである。

既に述べし如く、人間なるものは本質上何等かの國民として存在して居るのであるが故に、マルクスにより明にされた生命と制度との辯證法的關係は、これを國民の史的發展について見る時、最も具體的なものとなる。而もこの爲めに再びヘーゲル史觀を省ることが必要となる。

ヘーゲル史觀に於ける主體は形式上神であるが、實質上は國民精神であると考へることが出来る。即ち彼はその勝れた歴史研究に於て各國民の精神を具體的に把握したのであつて、神はむしろこれ等の諸國民精神を統一するところの原理として置かれてゐると見ることが出来る。而もこの國民精神は神の生命の契機又は分身として考へられて居るが故に、形而上學的なるものとして現れて居る。依つて我々はこれを人間的生命の現實の地盤より考へ直さなければならぬ。而も彼はその道を與へて居るのである。即ち彼は次の如くに述べて居る。「國民精

神は、その國民の宗教・政治組織・人倫・法制・風習の、更にまたその科學・藝術並に技術的才能の共通的特色となる。これ等のものゝ特殊な固有性は、かの一般的固有性即ち一國民の特殊原理から理解 *Verstehen* するべきであると共に、逆に歴史に於て見出されるところの事實的な詳細な事柄から、かの特殊性の一般的なるものが見出さるべきである。特定の特殊性が事實一國民の特有な原理を成すと云ふことは經驗的に認められ、歴史的な仕方では證明されねばならない」即ち國民精神なるものはこれ等國民的生命の表現——その國民の宗教・政治組織・人倫・法制・風習・科學・藝術等の國民的生命の表現の共通的特色であり、従つてこれ等表現を通じて理解するべきその國民的生命の個性である。我々はかくの如き國民的生命を現實的な人間的生命として把握すればよいのである。而もこの點に於てもヘーゲルはその道を與へて居る。曰く「國家に屬する各個人をして生命あらしめる國家の大切な原理は人倫と名づけられた。國家・その法律・その制度は國民の權利である。國家の自然・地面・山嶽・空氣・河川は國民の土地・國民の祖國・國民の外的財産である。此國民の歴史は國民の行爲であり、國民の祖先が造りしものは國民に屬し、その記憶に於て生命を保つ。それは丁度彼等がそのすべてにより所有されて居る如く、すべては彼等の所有である。何となればこれ等すべては國民の實體、その存在を構成して居るからである。國民の觀念はこれ等すべてのものによつて充されて居り、その意志はこれらの法律この祖國の意欲である。一國民の本質・精神をなすものは此成就せる總體である。國民の本質には各個人が屬して居る。各個人はその國民の子であり、同時に彼の國家が發展の過程にある限り、彼の時代の子である。」こゝにその自然、制度、文化に即して國民としての人間の存在が現實的に把握されて居る。先づこの具體的な國民の立場に立つことが必要である。

この國民なるもの、發展變革の構造を明にせんとせば、ヘーゲル史觀に就いて明にされし生命と表現と理解との構造と共にマルクス史觀に就いて明にされた生命と制度との辯證法的構造に據らなければならない。この際生命は國民的生命であり、制度は國民制度であり、國民なるものに於てはこの國民的生命が國民的制度によつて構成されてあるのである。而して前述せし如く國民的生命なるものは、自然と文化とを共にして居る人々が國民的共同感情によりて共同體的に結ばれて居るところのものであり、この國民的生命は更に國家的並に社會的制度によつて構成されて居るのであるが、これが即ち國民である。

先づ國民的生命なるものは、その發展段階に相應する特定の國民的制度によつて構成される。かく構成される國民的生命は、諸種の文化を表現し、人々の生命はこの文化の創造と理解を通して發展し行く。例へば中世に於ては中世的制度によつて構成されし國民的生命が、この制度の下に於て諸種の文化を創造し、またこれを理解することによつて發展し行くのである。

かくて特定の國民的制度の下に於て、發展し行く國民的生命が、最早やこの制度の下に於てその發展を繼續し得ざるに至れる時は、こゝにこの生命と制度とは矛盾の狀態に進み入り、分裂對立するに至るのであつて、これの國民的制度の變革の時期である。例へば古代の末期、中世の末期は即ちこの時期であつたが、市民社會時代の今日の時期も即ちこれである。

かくて國民的生命が自己と矛盾對立に陥れる制度を打破し、新なる制度を表現してこれを以て自らを構成し得て變革を完ふするならば、この新な制度の下に於て新な文化を表現し、以てその發展を續け行くのである。

かくて國民的生命は國民的制度との辯證法的關係に於て自己を一貫して發展せしめ行くのである。

かくの如き國民的生命と國民的制度との辯證法的關係が、國民の史的發展の根本的構造であり、従つてこのことが國民史觀の根本命題となるのである。

以上我々はヘーゲルの國家史觀とマルクスの社會史觀との對立を媒介として、國民史觀の根本命題に到達したが故に、進んでこの根本命題を更に具體的に展開しよう。

四、國民的變革の構造

この國民の辯證法的發展の構造に於て、特に具體的に明にされなければならないところのものは、その變革期に於ける構造である。この變革期に於ては、國民的生命が既存の制度を打破し、新なる制度を表現し以て自己を新に構成するのであるが、このことは如何にしてなされるであらうか。

これについては先づ諸種の國民的¹⁾制度の Träger 擔^い手なるものが考へられなければならない。即ち古代的制度については貴族階級が、中世的制度については武士階級が、而して現代の制度については市民階級が、即ちそれである。而してこれ等の階級の人々は、この各の制度の擔^い手としてその制度の下に於て支配的地位にあつてこの制度を確保せんと努力するのである。故に或制度より他の制度への國民の進展がなされるが爲めには、既存の制度の擔^い手が新な制度の擔^い手によつて置き替へられなければならないのであるが、このことは如何にして行はれるであらうか。

1) この諸種の國民的¹⁾制度については、拙稿『新國民主義と國民共同體』本誌一月號第一五九頁以下參照

ヘーゲル史觀に於ては、歴史の原動力は世界精神又は神であつて、この神は實現の段階に達した自己の理念を「英雄」又は「世界史的人間」を通じて實現するものであると考へられた。即ち彼等は「實踐的、政治的人間」であるが、世界精神の内に於て既に用意されて居るところの必然的な次の段階を洞察し、これを以て自己自身の目的となし、激情 *Leidenschaft* をもつてこれを實現するのである。他の人々は自己の心の中に無自覺的にある内面性を英雄によつて自覺せしめられ、自らの内に精神の抗し難き力を感じるが故に、この心の案内者に隨ふのである。

マルクス史觀に於ては、歴史的発展の原動力は物的生産力であつて、社會變革の時代に於ては既存の生産關係の下に於て發展し來れる物的生産力が、この生産關係と矛盾對立の關係に進み入る。このことは社會的には、既存の生産關係の擔ひ手としての有産者階級に對する生産力の擔ひ手としての無産者階級の階級對立として現れる。この階級闘争は、經濟社會に於ける支配者階級たる有産者階級が既存の生産關係を保持せんとするに對し無産者たる被支配者階級がこれを變革して新たな生産關係を齎らんとする争であつて、被支配者の勝利は既存の生産關係を變革し、物質的生産力の發展段階に相應する新なる生産關係を成立せしめ、これと共にその上層建築であるところの一切のものが變革する。

かくて變革の構造について云へば、ヘーゲル史觀は、究極的には神の生命を地盤とし、現實さるべき段階に達せる神の理念としての國民精神の擔ひ手たる「英雄」の史觀であり、マルクス史觀は物的生産力を根柢とする階級史觀である。國民史觀は、この點に於てもこの兩史觀を止揚することとなる。即ちこゝに於ては、國民的存在の土臺たる國民的生命に基礎づけられたる階級的對立の構造により明にされるのである。而して正にこの構造が、

歴史的事實の研究に基いて歴史家によつて述べられて居るが故に、先づこのことより見る。即ち原勝郎博士は、その名著『日本中世史の研究』に於て次の如くに述べて居る。

「抑も庶民を眼中に置いたか否か、階級的であるかないの標準となるのではなく、上流社會が庶民を自分等とは遙かに隔つた徒輩と目して、以てこれを眼中に置くと云ふことがそれが即ち立派な階級的精神である。扱て其階級的であつた状態からして、次第に平等の域に向つて移り行くのには彼の慈悲とか、憐愍とか云ふやうに、己を先づ一段高き地位に標置して、それから下に向つて施す所の其厚意に基くことは甚だ稀であつて、多くは上流者が下級者の己に接近するのを認容することによつて實現されるのだ。而して斯かる厚意は稀に自發的に發することもないと限るまいけれど、多くの場合に於ては寧ろ強請によつて己むを得ず表現せざるを得ぬ事情に立ち至るのである。然らば斯る強請が時と場合とを擇ばずに行ひ得るものであるかと云ふに、それは決してそうでない。強請と云へば少々語弊があるが、要するに請求してよい丈の資格が生じて然る後にした請求でなければ、眞に其欲する所を貫徹することが出來ぬ。換言すれば階級精神を打破するか、或は其衰微を促すのには、下層人民が進歩し、向上し、其屬する國家に於て己等が如何に重要な分子を構成して居るかを自覺することが最も必要である。喜んで上流よりする仁愛を仰ぎつゝある間は、到底階級精神の打破は出來ぬものである。」¹⁾即ち下層階級が高まると云ふことは「強請」によるのである。この「強請」とは「請求してもよい資格が生じ然る後になされた請求」である。この「資格」とは、この階級が「其屬する國家に於て……重要な分子を構成して居る」ことである。このことをこの階級が自覺して實力的な請求を爲すことが即ち「強請」である。

1) 同書第四九三頁参照。附點筆者

こゝに我々は歴史の推進力として國民的生命の地盤に基礎付けられたる階級的對立の構造を見る。即ちこの階級が新に「其屬する國家に於て重要な分子を構成」すると云ふことは、この階級が國民的生命の新なる要求に答へ得るが故である。この國民的生命が新に必要とするところのものを充し得る階級は、國民的生命の支持を得て實力を有する階級として新に高まり來るのであるが、これと反對にこれまでの支配者階級は嘗ては國民的生命の要求に答へ得従つて實力を有して居たのであるが今や新なる國民的生命の要求に答へ得ざるものとして衰へざるを得ない。かくてこれまでの支配者階級によつて確立せしめられ支持され而して今や國民的生命の發展と矛盾するに至れる從來の制度は崩解し行くと共に、新に高まり來れる階級によつて國民的生命の必要とする新な制度が成立發展確立せしめられる。かくの如くにして支配者階級の交替と制度の變革とは、國民的生命の地盤に於て行はれるのである。かくて國民的進展の究極の原動力は國民的生命であると云ふことが出來るのであつて、こゝに國民生命史觀たる所以のものが、見られ得るのである。今このことを古代より中世への變革的構造について見れば、先づ氏族共同體が國民單位にまで擴大された古代の國民社會に於ては、これまで社會的秩序の基礎をなせし氏族の共同感情は次第に稀薄となり來り、かくて社會の秩序は次第に亂れ、國民の生活は攪亂さるゝに至る。かくてこの國民社會の治安を維持することが國民的生命にとつて今や何よりも重要となり來るのであるが、而もこのことは、外的強力的に爲されなければならない。かくて何よりも武力なるものが、必要とせられるに至る。これまでの支配者階級であつた貴族階級は、この新な國民の要求を充たし得ないが故に、茲にこの要求を充たし得る武士階級が新に擡頭して支配的地位に登り、封建的制度なるものを成立發展確立せしめ、國民的生命はこの封

建的制度の秩序の下に於て新にその發展を續けて行くのである。

五、國民生命史觀と日本國民史

要するに歴史觀なるものは、歴史的發展の本質的構造を明にするものであるが、發展なるものは單なる變化 *Veränderung* でもなく單なる不變でもなく、それは變つて變らざるものであつて、そこに於ては變るものと變らざるものとが統一されて居るのである。従つて歴史觀の性質はこの變るものと、變らざるものと、この兩者の關係によつて定まる。ヘーゲル史觀に於ては、諸國家的存在なる可變なるものが、世界理性又は神なる不變なるものに於て、生命と表現と理性の構造により結ばれて居る。

マルクス史觀に於ては、「生産諸關係の總體」であるところの「社會の經濟的構造」が人間歴史の「眞實の土臺」であり、この可變的なものが物質的生產力なる不變なるものに於て統一され、兩者は發展し行く質料に對しこれを助長し又た束縛する形相の關係によつて結ばれて居る。¹⁾而もこの兩史觀に於ける根本原理は共に人間歴史を他律的なものとする。即ちヘーゲル史觀の神が人間の歴史を必然的に決定するのみならず、マルクス史觀の物的生產力によつても人間歴史は自然必然的に決定されるのであつて、經濟社會の發展法則は、鐵の如き必然性 *Notwendigkeit* をもつて作用し、自己を貫徹する諸傾向である。²⁾而して「人間は……一定の、必然的の、彼等の意志より獨立せる、諸關係をすなはち彼等の物質的生產諸力の一定の發展段階に適應するところの生産諸關係を、與へられたるものとして受けとる」かくてヘーゲル史觀の神の必然史觀に對しこれは物の必然史觀である。

1) 我々はアリストテレスに於ける質料 *Materie* と 相形 *Form* との關係をマルクスの *materielle Produktionskräfte* と *Produktionsverhältnisse* との關係に於て動的發展的に見る。マルクス自身、生産關係を物質的生產力との辯證法的關係に於てその發展を助長する *Entwicklungsform* として又はこれと矛盾する *Gesellschaftsform* 等として現はして居る。本論文第八頁參照

2) Marx, *Das Kapital*. Vorwort zur ersten Anlage.

かくてこの兩史觀の上に於ては、人間の實踐なるものは具體的な意味に於ては許されぬことになる。

かくて我々は歴史の根本構造を具體的な人間存在自身の中に求めて、神の歴史觀と物の歴史觀に對し、眞に人間の歴史觀を立てなければならなかつたのであるが、國民史觀なるものは人間の最も具體的な存在であるところの國民的存在、自體の中に歴史の根本構造を求めたのである。而して國民なるものに於て國民的共同感情によつて共同體的に結ばれたる人間の存在としての國民的生命が土臺をなし、これが更に國家的並に社會的制度によつて構成されて居るが故に、この國民的生命を變らざる根本原理となし、これと可變的な國民的制度との辯證法的關係によつて、人間の辯證法史觀としての國民生命史觀が成り立つたのである。

かくの如き歴史觀が單なる理念ではなく現實の歴史の構造であることは、具體的な國民に於て最も明に見られ得るのである。即ち外部よりの攪亂原因によりその一貫せる發展的構造が破壊されし國民は、具體なる國民とは云ひ得ないのであつて、かくの如き攪亂原因なくして、國民が國民としての本質的發展を一貫するものが、即ち具體的な國民である。かゝる國民史の發展は、國民の本質的な發展的構造即ち發展的理想型²⁾に最も近きものである。現存せる國民についてこれを見れば、我國民がかゝる意味に於て最も具體的な國民なるが故に、このことを我國民史の發展について見よう。

即ち國民なるものは氏族共同體に存在する人々が國民共同體に統一されることによつて成立つのであるが、我國民史に於ても、古くより氏族共同體があつたと考へられるのであつて、これが次第に擴大すると共に族長の支配權は強化して行つた。この氏族團體の長の支配に屬せし土地並に人民が、大化の改新に於て、王土王民とな

1) 拙稿『新國民主義と國民共同體』はこのことを明にすることを眼目とした。
2) 今日の認識論に於て *Entwicklungsidealtypus* と云はるゝものである。拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第二九八頁以下參照。
3) 同拙稿本誌一月號第一五四頁以下參照

つた時、民族共同體は遂に國民單位まで擴大されたのである。茲に天皇を「家長」とする日本の國民共同體がはじめて成立したのであつて、經濟的制度に於ても民族村落に於て行はれて居たと考へられる田制が國民單位にまで擴大され、國民單位に於ける班田收授の法として行はれたのである¹⁾。この國民共同體はかくて尙ほ民族的性格を有していたが故に藤原氏はこの民族的原理に基いて天皇の外戚として國家の權力的支配を掌るに至つた。而も天皇の國民共同體の中心としての地位には何等變りなかつた。この貴族階級の支配の下に於て前述せし如く、治安が保ち得ず武力的支配を必要とするに至つて、關東武士が新に支配的地位に昇り來り封建的制度を成立發展せしめた。而も我國に於てはこの武士的支配も、國民共同體の分化發展の一過程として國民共同體の中心としての天皇よりの委任の形に於て成立つたのであつて、從つて封建的制度なるものも國民共同體の上に成立つて居たのである。而してこの天皇よりの征夷大將軍任命の形式は封建的支配の全盛期である徳川時代を通じて變らなかつたのである。こゝに我國國民史に於ける國民共同體の一貫性が封建時代についても見られるのである。⁴⁾

この徳川時代の末期に於てこれまで鎖國的であつた日本の國民社會が、西歐の資本主義的諸國と接觸するに至つた際、國民的生命の何よりも必要とせしことは、今や東洋の諸國を次第に殖民地化しつゝ進み來れるこれ等西歐諸國に對して我國國民的存在を確保することであつた。而も今や没落に瀕せる幕府には最早やこの國民的生命の要求に答へる力はなかつた。これが爲めには分權を以て本質とする封建的制度を否定して眞に統一的な中央集權的國家を確立することが必要であつた。このことは日本の國民共同體の一貫せる中心をなせる天皇を中核とすることによつてはじめて徹底的になされ得るところのものであつた。⁵⁾かくて封建制度の下に於て不平を有せる下層

- 1) 内田銀藏、『日本經濟史の研究』並に。拙稿『琉球に於ける村落共同體と我國國民理想としての國民共同體』本誌第三十六卷第一號參照。
- 2) 附言。拙稿『新國民主義と國民共同體』本誌第一號第一六〇頁に民族的とあるは民族的の誤字につきこゝに訂正する。
- 3) 本論第十六頁
- 4) ブルーノ・タウド著『ニッポン』に於ては建築なる文化的表現を中心として我國

武士階級の人々は天皇並にその周囲の公郷を中心として相結んで、封建社會の支配者としての幕府に抗争するに至つたが、幕府は遂にこれに抗し得ずして大政を天皇に奉還せざるを得ざるに至つたのである。かくて中央集權的國家が成立して自己の存在を確保し得た我國民的生命は、更に西歐の諸資本主義國に追ひ付くことを必要としたが故に、この權力的國家は資本主義的社會の發展を催進せんが爲めに重商主義的政策を遂行した。かくて國家の保護助長の下に資本主義社會が發達するにつれその利益を代表するに政黨の勢力が次第に高まり來り、これまでに國家權力の擔當者となつて居た藩閥的勢力を次第に置き替へて行つた。而もこの政黨の行動が資本家階級の利益に偏して國民的生命の要求と矛盾するに至るや、國民の關心はこれよりはなれて政黨の支配力は衰へて行つた。この時に當つて軍部が、政黨政治の非をならし國民生活の充實を叫んで立つたが故に次第に政治的支配の地位に高まり來つた。而も既成政黨が本來資本主義的立場の拾ひ手であるが如く、軍部は本來國家主義的立場の擔ひ手である。かくて今日の變革期に於ても國民的生命の眞の發展は、國民的生命自體の新なる昂揚によつて果げられなければならないことが次第に明となりつゝある。

かくの如く我國民史の發展に於て、諸種の國家並に社會の制度の變遷を通じて、一貫して變りなき本體は、皇室を中心として共同體的に構成されて居る國民的生命であつて、この國民的生命はこの歴史的發展を通して益々確立し自覺的に高まり來つたのである。

の文化史に於ける天皇的なものの性格と將軍的なものの性格とを巧に對照せしめて居るが、以上の論述の點についても反つて外人の觀察として教へるところがある。

- 5) 胡適氏はこのことを支那に於ける當時の事情との對照に於て適切に述べて居る。拙稿『國民主義と滿洲問題』本誌昭和九年六月號參照